

学会発表渡航支援報告書

(ふりがな) 氏 名	はまにし えいじ	所属・職名
	濱西 栄司	文学研究科博士後期課程・日本学術振興会特別研究員 (DC1)
発表題名 (英 語)	Global Movements around 2008 G8 Summit in Japan —An Overview of the Relationship between Leftists and NGOs—	
著 者 名	Eiji HAMANISHI	
会 議 名 (英 語)	First ISA Forum of Sociology RC47 : Panel 5 East Asian Movements and Globalization (9-11:00, 7 th , July)	
開催地 (国、市)	Barcelona, Spain	
参加期間	2008 年 9 月 5 日 ~ 9 月 8 日	

Panel 5「東アジアの運動とグローバル化」の発表者は4人。まずKim教授（釜山国立大学、前韓国社会学会長）より東アジア共同体の理論的分析に関する発表が、次にShim教授（漢陽大学）による中国・韓国の女性運動の計量比較に関する発表がそれぞれなされた。つづいて日本から市民社会組織（CSO）の計量研究報告がなされ、最後が報告者であった。

ISAやRC47において東アジアへの注目度は高く（次回RC47 国際会議は来年ソウルで、2014年世界社会学会議は横浜で開催）、開始時間にも関わらず、RC47代表Thaler教授、副代表McDonald・Farro両教授を中心にフロアの若手研究者も交えて活発な議論がなされた。チェアパーソンは矢澤修次郎教授（成城大学：[前]一橋大学）。

発表内容：報告者は、洞爺湖サミットをめぐるグローバル運動の概要とその日本的歴史的背景について発表をおこなった。まず先行研究（McDonald・Farro教授の研究を含む）を検討し、構成アクターやネットワークに関する問いを立てたうえで（1節）、日本の社会運動史の概要を、歴史的計量データや福祉レジーム論の枠組みを用いて示した（2節）。その歴史の延長上にサミットをめぐるNGOネットワークと左派運動ネットワークの分裂状況を位置づけてその原因を説明し（3節）、分裂を統合するような北海道のローカル団体の試みが大規模デモやオルタナティブサミットのかたちである程度、成功したこと、及びその土台に「地元北海道を重視するローカル優先原理」があったことを明らかにした（4節）。結論を整理したうえで、グローバル運動研究に対して得られる示唆を提起し、次回のRC47 国際会議までの課題を述べて報告を終了した。

質疑内容：まずMcDonald教授から、グローバル運動が欧米では左派中心になっているが日本ではバランスが保たれている点、出会いの場で様々な身体的な諸実践が生みだされた点が大変興味深いというコメントがあった。それに対して報告者は実践にも海外から輸入されたものと日本独自のものがあることなどを付け加えた。またKim教授からは運動が位階的なナショナルネットワークになっている韓国よりも、セク特的に分裂してきた日本のほうがむしろ好ましいのではないかという質問があった。それに対してはしばしば「我々」／「彼ら」という排他的意識から暴力的抗争にまで

学会発表渡航支援報告書

至ったことを説明し、その背後に日本的近代化のありようがある可能性に触れた。そこから韓国・中国と日本の近代化の違い（国家の強さ、家族とイエの違い、情報化の違い）や東アジア共同体の可能性に関する議論がフロアを交えて展開された。他にも質問はなされたが時間は限られており、場所をかえつつ個別のやりとりが1時間以上続けられた。

今年もRC47のビジネスミーティングに出席できたが、On-line Journalプロジェクトやグローバル運動研究の国際ネットワーク、東アジア・レジームの研究ネットワークへの参加機会が与えられるなど、ネットワーキングの面でも多くの成果が得られる学会となった。

